

書 評

で、下級ホワイトカラーのかなりの部分を占める女性職員や兼業主婦（パートタイマー）の動向を著者が注目している点は興味をひく。というのは、彼女たちがキャリア組の男性と結婚しているばあい、「ほどほどの階級的混合」結婚が、「階級の経済的分断の先鋭化を政治的にガス抜きする」効果をもたらるからだ。ブルーカラーの男性と結婚する（交差階級的な）ケースも多いので、効果のほどは確認する必要があるだろうが、それ以上に強調しておきたいのは、このような意識や行動の根底にある「階級の経済的分断」が女性の労働市場への大量参入によって温

存され隠蔽されている事実である。階級分解と性別階層分化とを統一的に把握する立場を推し進めていたら、著者の分析や主張はもっとアピールすることができたにちがいない。いずれにせよ、本書が提起した問題はイギリスだけではなく、総保守化への傾斜を強めつつあるかにみえるわが国の状況にとっても、他人事ではない重要な示唆をふくんでいる。その意味で、小冊子ながら大いに参考になるであろう。

（渡辺雅男訳、青木書店、1993年12月刊、2266円）

（帝京大学教授）

久保新一著

『戦後世界経済の転換——ME化・NIES化の線上で』

五木 武利

本書は全9章からなり、対象範囲も日本、西ドイツ、アメリカ、韓国、台湾、香港、シンガポールと、今日の世界における問題地域をほぼカバーした、文字どおりの「戦後世界経済」の解析を試みた大著である。また久保氏の1986年から1993年のあしかけ7年にわたる研究成果を集大成した著書でもある。ちなみにそれは章だてをみれば一目瞭然である。

- 第1章 ME化・NIES化の分析視角
- 第2章 冷戦体制解体の力学と日本・東アジア NIES—アジア的基盤におけるME化の受容と展開
- 第3章 アメリカ産業のリストラクチャリングと「空洞化」—鉄鋼・自動車・ハイテク産業中心に
- 第4章 西ドイツ産業危機とME化

- 第5章 転換期の台湾経済における輸出加工区とME産業
- 第6章 転換期の韓国経済とME産業
- 第7章 香港とシンガポールのME化・情報化
- 第8章 1980年代における日本のME化・情報化
- 第9章 冷戦世界経済の性格と分析視角

本書は冷戦体制を座標軸とし「1967年（アメリカ—評者）デタント路線への転換と、1971年（アメリカ—評者）貿易収支の78年ぶりの赤字転落に示されるIMF体制の破綻」（ii頁）を画期として、その冷戦体制は解体過程、「冷戦の第二ラウンド」にはいる、としている。そして「この第二ラウンドの展開基軸であると同時に解体基軸となったME化と日本・NIESに焦点をあて、その分析を通して興隆の原因と特質を探り、

それが冷戦後世界にもつ意味を明らかにすること」(iii頁)が本書の目的である。その分析の方法論は「再生産論とその具体化」であるとし、

「国際化しハイテク化・サービス化した現段階の経済構造分析にはなじまない」(iii頁)という批判も予想されうる。がしかし「各国の内因(構造的特殊性)分析」(iii頁)の充実のためには、今日でもその有効性はいささかも失われてはいないと主張し、その方法を解析の手段とするとしている。

こうして分析の座標軸と方法論を確定した上で、久保氏は各章へと論を進める。ここでは紙幅の関係で全部の章を要約・紹介するわけには行かないので、特に評者の問題関心にそって重要と思われる章を中心として、内容を紹介したいと思う。第1章では「東アジア NIES の諸説」の検討をふまえ、これらの地域の「興隆」の「歴史的基盤」と「世界史的条件」を展開した上で、第2章へと氏は論を進める。第2章は「冷戦体制の解体の枢要点」を「冷戦と科学技術革命の産物である ME 化・情報化を基調とする新しい生産重心が、東アジア的基盤のうえに受容されてそこで展開し」(38頁)たことにおき、これが「日本や東アジア NIES の興隆」と裏腹に米を行き詰まらせ、ソ連を崩壊に導いたと、するのである。その「受容基盤」とは「欧米市民社会にたいする日本、東アジア(社会主義中国を含む)の『擬似共同体社会』の勃興と優位」(38頁)とする。さらに具体的に韓国や台湾にそくして、冷戦の力学をおいた上で、「反共・軍事独裁体制(アジア的専制支配=隷従の現代的形態)の基盤を形成し、資本による総体奴隷制的労働編成を可能にし、それが ME 産業の受容基盤となっていく。」というのである。東アジア NIES・日本興隆の興味深い指摘がここでなされている。注目すべき論点であろう。

次に興味深い問題提起としては、1987から90年にかけてのいわゆる「バブル景気」と「ME 循環」規定についてである。「……輸出依存型成長に代わる、高度成長期以来の民間設備投資の盛り上がりを中心とした内需主導型成長であり……中身は、情報化投資であり高度成長期の鉄鋼=機械4部門主軸の『投資が投資を呼ぶ』能力増強・新設投資『I 部門内部循環』の型とはいちじるしく性格をことにしている」(233頁)。そして「『I 部門内部循環』に代わる新しい『ME 循環』が登場する。」(244頁)、と主張する。戦後日本資本主義の蓄積メカニズムの転態の大胆な指摘である。1985年産業連関表の解析によって「ME 循環」を導出・規定しているので、1985年以前にすでにそのメカニズムが形成されたのか、それとも1980年代後半「バブル景気」が形成の画期となるのか、定かではないが、一步踏み込んだ展開・発展を期待したいところである。

本書が氏の労作であることは冒頭で述べたとおりであるが、評者なりの問題点・疑問を述べることによって、まとめしよう。問題はまず構成上の基軸である。冷戦体制解体という座標軸の画期の問題である。7年間にわたってかかれた論文集であるので、やむを得ないのかも知れないが、氏は冷戦体制の解体のメルクマールの第一段階を「1971年(米)貿易収支の赤字転落に示される IMF 体制の破綻」(ii)に、また第二段階を「85年のアメリカの債務国転落」に求めておられるようである。その際、時期区分を「冷戦体制は解体の第一局面を迎える。」(ii)あるいは「(1)冷戦体制解体の第一階梯」(41頁)、また「冷戦体制は解体の第一ラウンドを迎える。」(43頁)などとしているが、評者としては用語法上の不統一が気になった。

次に第二点であるが、まさしく世界経済論であるのでアメリカ、日本、西ドイツ、韓国、台

書評・新刊紹介

湾、シンガポール、香港とおよそ今日問題となる地域をすべて網羅している。このスケールには驚かされるが、それぞれが各章として立てられているために、相互の関係・連関が希薄になってしまっている点である。つまり冷戦体制解体座標軸上の韓国はわかるが、そのときの日本との関連、あるいはアメリカとの関連などの分析が結果的に等閑視されてしまったといえるのではないだろうか。これは分析方法に原因があるのかも知れない。つまり「各国の内因（構造的特殊性）分析」（iii頁）を重視するための「再生産論とその具体化」を強く押し出すあまりそ

うなったのかもしれない。

しかし本書はこのような点があったとしても今日出版されることの意義は大きいし、問題点を補って余りあると思う。それは、冷戦体制解体を正面にかけ、マルクス主義経済学の側では、もう誰もいわなくなったポスト冷戦の社会の展望を真正面の課題、問題意識の射程におさめていることである。人類史の本史と前史の狭間であって、多重画期の今日であって、苦悩をつき抜け歓喜の歌を歌おう。展望を語ろう。

（白桃書房、1993年11月刊、3,500円）

（労働問題研究家）



竹中恵美子・久場嬉子編

『労働力の女性化』

1986年アメリカで7か国（イギリス、カナダ、フランス、旧西ドイツ、イタリア、スウェーデン、アメリカ）の女性労働に関する国際会議が開かれ、先進国に共通する女性労働の特徴として女性の労働力率の著しい上昇をあげ、「労働力の女性化」（Feminization of the Labour Force）と称した。本書の題名および内容はもちろんそこからきているのだが、この本は当初の概念を超えて、日本の女性労働の現状を見ながら「労働力の女性化」を「女性の労働そのもの」と広く把えなおしている。

例えば OECD 加盟国である日本においては、女性労働力率は女性労働力人口の半分程度で、しかも長年にわたってほとんど増大していない。

しかし雇用者総数中の女性雇用者割合においては著しい増加をみることができる。したがって「労働力の女性化」は「労働力または雇用の女性化」というつかみ方がされねばならない。さらに女性労働の分析にあたっては労働力化されない部分にも焦点があてられねばならない。家庭責任が個々の女性に負わされる結果の非労働力化や、労働として認められていないが、非労働力であろうと労働力であろうと女性であるかぎり荷わなければならない家事労働についても言及されているのはそのためである。

さらには、完全には資本主義化していない途上国の、いまだ苦汗の重筋的な家事労働を荷いつつ、様々な過度的な社会的労働に従事したり、世界的大資本によって労働力化される女性の実態も分析される。経済のグローバル化はこれらの地域を急激に変化させているからである。

したがって「労働力の女性化」は一つの時代のシンボリック・ワードであったとしても、本書の内容はそれよりももっと広い。

各章はおおむねそれぞれの課題にしっかり答えている。特に前半の日本的企業社会の中での女性雇用のきめ細かい分析には学ぶところが多